

⑬ 思いさえあれば
おかげさまで連載も2年目に突入しました。「エデュテイメント」というテーマで、お笑い芸人時代の話、小学校教員や京都市青少年科学センター時代の話、大学教授としての話、さらに娘と息子を持つ父親としての話など、いろいろなテーマで書かせていただきました。この1年で講演会の依頼をいただいたり(現在の社会情勢から延期となり、実現はまだまだ先となりそうですが…)、「元芸人が教える『笑って学ぶ』小学校理科」



大阪成蹊大准教授 福岡亮治

(東洋館出版社)という本を出版したり、エデュテイメントをテーマにすてきな機会に出会えたことに感謝しています。



今回は、エデュテイメントとは何かという原点について語りま

学びの楽しさ、誰でも伝えられる

ertainment)を合わせた言葉です。専門用語というよりは、娯楽施設や博物館等で使用されている造語となります。意味を簡単に説明すると「子ども達が遊び、楽しむうちに何かを得たり、学んだりする」という教育手法です。私は、元お笑い芸人の大学教授という経歴を生かして、そのエデュテイメントの実践研究をしています。

私が芸人を辞めてからの20年間で社会の変化とともにお笑いの要素も変わってきています。最近、「人を傷つけない笑い」が強調され始めました。昔は、人の容姿をイジって笑いをするといった光景をよく見かけましたが、お笑いの世界では「人を傷つけない笑い」が浸透してきています。そして、教育に関わるエデュテイメントでは、「人を傷つける」ということは絶対にあってはなりません。

私は、身近な科学をテーマに実験を交えながら楽しく伝える「サイエンスショー」を定期的に行っています。そして、実践するだけでなく、広めるために後輩を育てています。後輩の初舞台のために、私のネタや方法を惜しみなく伝授しました。実験の検討も済ませ、全てが完璧でした。しかし、シヨックなことが…。その後輩が衣装としてつけたカツラを用意していたのです。「お笑いのプロではない人間が容姿で笑いを取ることが危険」「教育者なら理科の楽しさだけで子どもたちの笑顔を引き出すべき」と諭し、理解を得ました。お笑いエデュテイメントは似て非なるもの。笑いに走る

と教育としての存在意義が崩れてしまいます。「エデュテイメント=お笑い」と勘違いされてしまいますが、お笑い芸人さんのようなスキルは必要ありません。子どもたちが興味を持つことができる教材(題材)を見つけ、学ぶことの面白さ、わかる楽しさを伝えることが大切です。そう考えるとエデュテイメントは「子ども達に楽しく伝えたい」という思いがあれば、誰にでも実践できるすてきな教育手法なのかもしれません。

